

# RSNA 2021

## Redefining Radiology

放射線医学における世界最大級の学術集会である第107回北米放射線学会 (RSNA 2021) が、2021年11月28日(日)~12月2日(木)の日程で、米国イリノイ州シカゴ市のマコーミックプレイスを会場に開催された。バーチャルミーティングも行われ、2022年4月30日(土)までオンデマンドで視聴・閲覧が可能となっている。テーマには“Redefining Radiology”が掲げられ、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)のパンデミックにより世界が大きく変わる中、これからの時代の放射線診療を再定義するための5日間となった。

### ● 2年ぶりにシカゴでの開催

2019年12月に中国で感染が確認されたCOVID-19。翌2020年3月には世界保健機関(WHO)がパンデミックを宣言し、米国でも感染者・死亡者数が増加したため、前回のRSNA 2020は史上初のバーチャルミーティングだけの学術集会となった。

RSNAは、2021年4月の時点で、2021年の学術集会は、従来どおりマコーミックプレイスで行うことをアナウンスして、4月14日(水)からホテルの宿泊予約を開始。5月5日(水)に演題応募を締め切り、7月21日(水)からは参加登録を受け付けた。

一方で、マコーミックプレイスでの開催に当たって、RSNAでは現地参加者に対しワクチン接種を参加条件とし、会期中の会場内でのマスク着用を義務化した。RSNA 2021実地開催期間とほぼ同時期の1週間(11月29日~12月5日)における米国の新規感染者数は75万2394人(厚生労働省検疫所発表)となっており、日本と比較してけた違いに多い状況が続いている。パンデミックが続く中、日本からは現地参加がしにくい状況であり、また所属施設が渡航に制限を設けているケースも多い。このようなことから、日本在住者の現地参加は、Technical Exhibitも含め厳しく、マコーミックプレイスに赴いた日本人は、留学など米国在住者が中心であった。

なお、会期を変更したこともRSNA 2021のトピックである。RSNA 2019までは実地開催の期間を6日間(Technical Exhibitは5日間)としていたが、RSNA 2021はパンデミック前から5日間(Technical Exhibitは4日間)に短縮することになっていた。バーチャルミーティングだけの前回は7日間の日程であったが、今回は当初の予定どおり5日間で閉会した。

### ● 放射線診療を再定義する機会

COVID-19のパンデミックの収束(終息)が見通せない状況にあって、アフターコロナ、ウィズコロナの時代に放射線診療はどうあるべきか、RSNA 2021はそれを考える機会になったと言える。初日11月28日にArie Crown Theaterで行われたPresident's Address and Opening Sessionの中で、大会長を務めるシンシナシティ大学放射線科教授のMary C. Mahoney, M.D.は、“Redefining Radiology: The Road Ahead”と題し、これからの時代の放射線診療を再定義し、進むべき道を示した。

Mahoney大会長は、COVID-19のパンデミックが、世界中の医療が抱えているマンパワー不足や非効率性、アクセス性の不平等といった課題を浮き彫りにしたと述べた。その一方で、今回のパンデミックは、これからの放射線診療のあり方を考える機会になったと指摘。人工知能(AI)などのデジタル技術を活用し



RSNA 2021の初日11月28日に行われたPresident's Address and Opening Session



RSNA 2021バーチャルミーティングのWebサイト

て、地域や医療従事者、患者と協調することが放射線診療にかかわる者には求められており、それがまた自分たちの価値を高めると訴えた。

また、Mahoney大会長のPresident's Addressに続き、クリーブランドクリニックのChief Clinical Transformation Officerを務めるJames Merlino, M.D.の基調講演が行われた。Merlino氏は、*Service Fanatics: How to Build Superior Patient Experience the Cleveland Clinic Way*の著者として知

